九州産業大学国際文化学部紀要　第8号 101-133（1997）

ジョルジュ・サンド—ギュスターヴ・フロベール往復書簡を読む（II）

持　田　明　子

（1997年1月21日受理）

はじめに

17歳という年齢差があるばかりか，気質，生活態度，経済的状況，政治的信条，そしてなかんずく作家としての審美観や創作態度を大きく異にしたジョルジュ・サンドとフロベールが，1863年より一方が死を迎えるまでの10余年間，友情にあふれ，時に諧謔的な，だが常に相手への尊敬の念と深い思いやりにみちた手紙を間断なく交わすに至った経緯を前号で見た。

*

ところで，ジョルジュ・リュバン氏の編纂のもとに，収録数およそ2万通，2万4,500ページを越える，全26巻の『ジョルジュ・サンド書簡集』(*George Sand Correspondance*) が刊行され (1964—1995)，文壇や芸術界の域を越えた，同時代の精神的・知的活動のほとんど全領域に及ぶ2,300人もの人々との交友がつぶさに明らかになった。この多彩な人々との交わりがわれわれに示唆するものは，多様な考えに耳を傾けるジョルジュ・サンドの精神の柔軟性のみならず，人間と社会に対する飽くことのない関心と探究心，そして深い洞察力であろう。

手紙を直接に交わさなかったにしても，たとえばこのフロベールという，異なった社会的，芸術的環境にあった人間を媒介として，ジョルジュ・サンドの交友関係は当然のことながら新たな広がりを得た。

フロベールとの往復書簡が始まるまで，ジョルジュ・サンドの手紙で一度としてその名が語られることのなかった劇作家ルイ・ブイエ (Louis Bouilhet, 1822–1869) もその1人である。ジョルジュ・サンドがブイエに宛てた手紙は1通（1867年3月4日付）のみで，2人の間に打ち解けた関係が確立したと言うことはもちろん，できないが，ジョルジュ・サンドは〈フロベールの友人〉の戯曲の上演には進んで足を運んだ。

前号で読んだ〔手紙17〕,〔手紙19〕ですでに言及されているように，1866年秋，『アンボワーズの陰謀』のオデオン座での上演が決まり，その後の手紙でもしばしば話題になる。フロベールが見せる〈初日を待つ友〉への気づかい，そして，そうしたフロベールをごく自然に支えるジョルジュ・サンド――往復書簡は2人の細やかな心情を思いがけぬほど鮮やかに映し出す。

〔手紙21〕 サンドよりフロベールへ

アンドル県ラ・シャトル，ノアン

〔18〕66年9月28日

了解しましたよ，親愛なる仲間にして良き友。ご友人の戯曲が上演される日にパリにいるようできる限りのことをいたしましょう。そしていつものように，友人としての義務を果たしましょう。それから，あなたのお宅に伺い，1週間，滞在いたします。ただし，あなたの部屋を明け渡さないという条件でですよ。迷惑をおかけすることは私を困惑させます。それに私は眠るために七面倒な物を必要としません。家畜小屋の犬よろしく，灰の中であれ，台所の長椅子の下であれ，私はどこででも眠ります。あなたのお宅ではどこもかしこも清潔でぴかぴかしていますから，どんな所でも居心地がいいのです。(…) 大いにおしゃべりしましょう。天気が良ければ，あなたを無理にも駆けさせるつもりですよ。相変らず雨が降っていれば，2人で恋の苦しさを語り合いながら，脚の骨を焼きましょう。(…)

人の顔は年々，変ります。思考し，探究する人々の顔に年齢が新しい性格を絶えず与えます。だから，同じ人間の肖像が似ていなかったり，実物にいつまでも似てはいないのですね。私は実によく夢想にふけるのです，そして実際に生活しているのはほんのわずかですから，しばしばわずか3歳のようなものです。でも，夢想が陰うつなものであれば，翌日，私は300歳になっていることでしょう。あなたの場合も同様ではありませんか？ 人生が何であるか分からないままに始めているような気分になることが時としてありはしませんか？ そして，また時に，あなたに漠とした思い出と悲しい印象があるばかりの数千世紀の重さが覆いかぶさっているのをお感じになりませんか？ 私達はどこから来て，どこへ行くのでしょう？ すべてが可能です。すべてが未知なのですから(1)。

〔手紙22〕　サンドよりフロベールへ。

ノアン，〔1866年〕10月19日

親愛なる友へ

オデオン座から，ブイエの戯曲の初日は27日だと書いてきました。26日にはパリにいる必要がありますね。いずれにしても，仕事で行かなければなりません。その日と翌日，翌々日は，マニー亭で夕食を取るつもりです。これで，あなたはどこで私をつかまえられるかお分かりですね。初日にはあなたがいらっしゃると思いますから。

いつも変らず，心から。

G. サンド(2)

〔手紙23〕　フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ〕日曜日，朝

〔1866年10月21日〕

大切な先生

『アンボワーズの陰謀』は今度の土曜日の予定で公告されています，もしくは，間もなくされますが，実際には29日の月曜日が初演です。もちろん，あなたを当てにしています。

私は水曜日の夜から，タンプル大通り42番地にいます。

それでは，近いうちに。あなたを抱擁いたします。

Gve. フロベール

２人でこちらに週末に，つまり11月２日か３日頃，戻って来ましょう。落ち着いて，ゆっくりと，そして，大いに語りましょう(3)。

〔手紙24〕　サンドよりフロベールへ。

ノアン，〔1866年10月〕23日

親愛なる友へ

戯曲が29日の予定であれば，２日余計に子供たちと過ごし，28日にこちらを発ちます。

あなたが，私とあなたのご友人と一緒に，29日，仲間うちで，マニー亭でいつもより早く，ご友人のお望みの時間に，夕食を取ってくださるかどうか，おっしゃっていません。28日，フィヤンティーヌ街57番地にひと言お返事をください。

それから，あなたのお望みの日に，お宅に伺いましょう。あなたと大いにおしゃべりすることは，あなたのお話に耳を傾け，あなたを心から愛することですよ。私が今，取りかかっているものを持って行きましょう。取るに足らないもの(*)をお聞かせすることで，私の田舎の言葉を使えば，私に勇気が与えられるでしょうから。ノアンの陽光をあなたにお届けできるものならば！　燦々と輝いています。

あなたを抱擁し，祝福いたします。

G. サンド[4]

(*『カディオ』)

〔手紙25〕　フロベールよりサンドへ

〔パリ〕土曜日，朝

〔1866年10月27日〕

大切な先生

初日は夕食を取りません。非常に神経質になっていますし，同様に神経質になっているもう一方の男に気を配らなければなりませんから。2人からのお礼を申し上げます。それでも，幕間に，小さな楽屋であなたにお目にかかれることを期待しています。

木曜日か金曜日頃，クロワッセで一緒に食事をし，落ち着いておしゃべりしましょう。

今からその時まで愛をこめて

Gve. フロベール[5]

《4時半，恙無く到着，こちらは少々寒いようです。(…) 明日はブイエの芝居です。桟敷席を同封したマルシャルの手紙が届いていました。ポポトも一緒に出かけますよ[6]。》と記した，息子モーリスの妻リナへの10月28日付の手紙が示すように，ジョルジュ・サンドは28日夕刻，パリに着き，いつものようにマニー亭で夕食を取った。

翌29日，『アンボワーズの陰謀』の初日にオデオン座に足を運び，備忘録に次のよう

に認めた。

《マルシャルとマニー亭で夕食。そのあとオデオン座で，ルイ・ブイエの『アンボワーズの陰謀』の初日。大成功，見事な戯曲，耳に快い韻文，巧みな演技。（…）幕間毎に，そして，終演後，フォアイエに行く。皆に会う。ジラルダン，ヴァクリー，ムーリス，サン・ヴィクトール，等々。フロベールとブイエは，至極当然の喜びの中で幸せそうであり，魅力的である。(7)》

*

〔手紙26〕　フロベールよりサンドへ

〔パリ〕タンプル大通り42番地

〔1866年11月１日〕木曜日，正午

大切な先生

母は今度の土曜日にわれわれが到着するのを待ち続けています。さて，急行列車は１時丁度に発車しますので，私は12時半に歩道にいます。了解済みのことです。お返事なさるには及びません。

愛をこめて

Gve. フロベール(8)

以前からの約束通り，ジョルジュ・サンドはフロベールと共に，パリを発ち，クロワッセのフロベール邸に１週間，２度目の滞在をした。簡潔な言葉でながら，この間の行動や印象をつぶさに書き留めたその備忘録から，２人で散策を楽しみ，時を忘れて語り合い，そして互いの作品を朗読する――年齢差，性別も，まさしく世俗的なもの一切を超越して〈全き共感のとき〉を悠悠と過ごす彼らの姿が鮮やかに現出する。そして，さらに深められた友情の絆が今や堅固に結ばれたことは明らかである。

11月４日，日曜日，ルーアン

《（…）そのあと，ギュスターヴが私に夢幻劇⊛を朗読。素晴しい，魅力的なものに満ちているが，長すぎ，多彩にすぎ，内容が豊かにすぎる。（夜中の）２時半までおしゃべり。空腹を覚える。２人で台所に降りて行き，コールドチキンを探す。ちょっと庭に出てポンプで水をくむ。まるで春のように暖かい。２人で食べ，部屋に戻り，たばこを吸い，また

おしゃべりをする。朝の4時に別れる。》[9]

(⊛『心の城』)

11月5日，月曜日，ルーアン
《変らず素晴しい天気。昼食後，散歩に出かける。ギュスターヴを誘う，彼は果断に決心する。身づくろいをし，私をカントルーに案内。すぐ近くの，丘の上にある。何と素晴しい地方，何と気持ちのいい，広々した，そして美しい眺望！（…）3時に帰宅。仕事をする。夕食後，ギュスターヴと再びおしゃべり。彼に『カディオ』を朗読。2人でまたおしゃべり。ブドウ1房とジャムをつけたパン切れの夜食[10]。》

11月7日，水曜日，ルーアン
《曇り，寒くはない。庭を一回り。『モン＝ルヴェシュ』の仕事。おとなしい1日。夜，フロベールが彼の小説⊛の第1部を私に朗読。申し分ない。10時から2時まで朗読。4時まで話す[11]。》

(⊛『感情教育』)

11月8日，木曜日，ルーアン
《変らず曇り。庭を一回り。仕事。夕食。おしゃべり。フロベールの小説の朗読。おしゃべり[12]。》

11月10日午後，ジョルジュ・サンドはルーアンを離れ，駅までフロベールとフロベール夫人が見送った。

〔手紙27〕 サンドよりフロベールへ

パリ，土曜日，夜
〔1866年11月10日〕

パリに着いて，悲報を知らされました。昨晩，私達が話に興じていたとき――昨日，私達は彼のことを話題にしたように思います―私の友人のシャルル・デュヴェリエが亡くなったのです，この上なく優しい心と純真そのものの精神の持ち主でした。明日，葬

儀が行われます！　私より1歳年長でした。私と同世代の人間が1人，また1人と死んでゆきます。私はあとまで生き続けるでしょうか？　それを切に望む気持ちは私にはありません，とりわけ，喪や永別の日には。この世においても，また，あの世にあっても，常に愛することが私に許されるのでさえあれば，神の思し召しのままに。私はすでに亡くなった人々に対し深い愛情を抱き続けています。けれども，人は生きている人間を別な風に愛するものです。彼が私の心の中で占めていた場をあなたに差し上げましょう。これまでの持ち分に加えてあなたは大きな場を持つことになりますね。この贈り物をあなたにすることが私の悲しみを和らげるように思われます。文学の見地からすれば彼は一流ではありませんでした，その優しさと率直さから人々は彼を愛したのです。政治情勢や哲学にもう少し気を取られていなければ，魅力的な才能を見せたことでしょう。気の利いた戯曲『ミシェル・ペラン』を残しました。

私は道中の半分を1人きりで，あなたや母上やクロワッセのことを考えながら，そしてまた，あなたのおかげで親しい神のような存在となったセーヌ河を見つめながら過ごしました。それから，風変りな男と，先日のパントマイムの音楽のように騒々しく，調子外れの愚かさを見せる2人の女性が道連れになりました。たとえば，こんな具合です。「太陽を見つめたものだから，目の中に2つ点ができましたわ。」—夫「それこそ光点だね。」休みなしに1時間，こんな調子でしたよ。

一家の買い物を残らずしなければなりません，私の役目ですから。打ちのめされて，これから眠りにつきます。夜の間ずっと，泣きに泣きました。それだけに一層，あなたを抱擁しますよ。これまでよりもっと私を愛してください，悲嘆に暮れているのですから。

G. サンド

ルーアンの司法官に，ご友人がおありでしょうか？　もしいらっしゃるのであれば，アメデ・デプリュノの名を心に留めていただけるよう，一筆，そのご友人に書いてください。明日にもルーアンに提出される民事訴訟です。このデプリュノは正直そのものの人間であるとお伝えください。私と同じように彼のことを信用してくださって結構です。聞き入れてくださることで—そのことが実行可能であればのことですが—あなたは私のために尽くしてくださることになります。あなたのご友人方のためのお返しを条件に。(13)

ジョルジュ・サンドがさらに翌日，書き送った，ブイエの戯曲が好評であることを伝える短信にパリを離れている友への心遣いがにじみ出る。

〔手紙28〕 サンドよりフロベールへ

〔パリ〕日曜日

〔1866年11月11日〕

『アンブロワーズの陰謀』—私の門番がこんな風に話すのですよ—の金銭的な成功が予測されているとお伝えすることであなたに喜んでいただけると思います。今晩，『ヴィルメール』のときのように行列ができました。マニー亭という晴雨計も晴天を示していますよ。

というわけで喜んでください。これが持続すれば，ブイエは経済的な困難から脱出できますね。

G. S.[14]

ルーアンより帰京した日，ジョルジュ・サンドが息子モーリスに宛てた手紙に，クロワッセでの日々に触れた次の言葉を読むことができる。

《ジュミエージュ修道院には行きませんでした。仕事をしたのです。第4幕を書き直しました。『カディオ』を朗読し，実際，これはフロベールの気に入りました。彼の方は，その小説を私に読んでくれました。非常に，非常に見事なものです。私達はおしゃべりにおしゃべりを重ねました。(…) 昨日，パイナップルが届きましたよ。美味で，フロベールはこれほどおいしいパイナップルは食べたことがないと明言しました。(…)[15]》

先に引用した備忘録の言葉とともに，クロワッセに満ちていた，まるで文学に夢中になった少年同士のような，親密な雰囲気を伝えるものである。

そしてフロベールもきわめて率直に共感を語る。

〔手紙29〕 フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ〕月曜日，夜

〔1866年11月12—13日〕

あなたは悲しんでおられます，お気の毒な友，そして大切な先生。デュヴェリエの死を知らされて私がすぐに考えたのはあなたのことでした。あなたが彼を愛しておられたので，私はあなたをお気の毒に思います。この永別がこれまでの数々の永別に加わった

のですね。われわれの心には何と多くの死者がいることでしょう！　われわれは皆，その心の中に大きな墓地を持っているのですね。

あなたが発たれて以来，私はすっかりねじが抜けたようになっています。もう10年もお会いしていないような気がします！　母と話をするとき，話題はいつもあなたのことばかりです。ここではだれもがあなたを深く愛しています。あなたという人間の中にこれほどまでにさまざまな，数多くの，そして，きわめて稀な美点を集めておられるとは，一体どんな星のもとにお生まれになったのでしょう？　あなたに、私がどういう種類の感情を抱いているのか分かりません。けれども，私は特別な、今日までだれにも感じたことのない愛情をあなたに対して覚えます。われわれは大いに気が合いました，そうではありませんか？　心なごむ時でした。

大変楽しかったので，他の人間には味あわせたくないと思っているほどです。クロワッセのことを何らかの本の中でお使いになられるときには，読者にそれと見分けられることのないように変えてください。そうしていただければ大変ありがたく思います。ここにあなたが滞在なさった思い出はわれわれ２人のためのもの，私のためのものです。これが私の利己主義（エゴイズム）です。

とりわけ，昨晩，10時，あなたがここにいらっしゃらないのが残念でした。出入りの薪屋で火事が発生しました。空はばら色に染まり，セーヌ河はスグリのシロップの色でした。私は３時間，消火ポンプを動かして，あのキリンを連れて来たトルコ人のように疲労困憊して帰宅しました。

シリとデュクネルはあなたの戯曲について何と言いましたか？　いつ上演されるのです？　これからあなたは何をなさるおつもりですか？　きっと，大革命の場面でしょう？

ルーアンのとある新聞（『ル・ヌヴェリスト』）があなたのルーアン訪問を詳細に報じました。その結果，土曜日，あなたとお別れした後で，私に憤慨している幾人かの俗物（ブルジョア）に出会いました。私があなたをひけらかさなかったというのです。この上ない名ぜりふが元司法官の口から出ました。「ああ！　その女性がここにいたのを知っていたら…われわれは彼女に…われわれは彼女に…」５分間、彼は言葉を探していました。「われわれは彼女に…にっこりほほえんだことでしょう。」全く大したことではなかったでしょう，そうではありませんか？

司法官と言えば，デプリュノの訴訟事件についてもっと詳細な情報をお送りいただかなければなりません。どんな事件です？　いつ裁判にかけられるのです？　控訴，それとも一審ですか？　私にできる限りのことをやりましょう，ご心配には及びません。

あなたを《もっと》愛することは私には困難です。けれども，愛情をこめてあなたを

抱擁いたします。今朝の，大層もの悲しいあなたのお手紙はどん底にありました。われわれはさまざまなことが口の先まで出かかっているときにお別れしたのですね？　われわれ2人の間で，全ての扉が開かれているわけではありません。あなたが私に深い尊敬の念を起こさせますから，私はあなたにおたずねする勇気がないのです。

さようなら，あなたの美しく，優しいお顔に口づけします。

あなたの

Gve. フロベール(16)

〔手紙30〕　サンドよりフロベールへ

火曜日から水曜日にかけての夜。

〔パリ，1866年11月13日—14日〕

私の戯曲の朗読はまだです。少しやり直したいところがあります。それほど急ぐことはありませんから。ブイエの戯曲は素晴しくうまく行っています。私の年少の友人カドルの芝居が次に上演されるとのことです。どんな理由にしろ，私にこの若者をけ落とすつもりは全くありません。これで，私の方はかなり先に延期されることになりますが，私は怒っておりませんし，全く傷ついておりません。何という文体でしょう！　幸いなことに私はビュロのために書いているのではありません。昨晩，オデオン座の楽屋であなたのご友人に会いました。握手をいたしました。幸せなご様子でしたよ。それから私はデュクネルと夢幻劇について話しました。彼はその作品を大いに知りたがっています。あなたがそれに取り組むお気持ちになられたとき，姿をお見せになるだけで十分です。大歓迎されましょう。

マリオ・プロトが明日か明後日，新聞の変容に関する正確な情報をくれることになっています。明日，私は外出して，あなたの大切なお母さん（ママン）の靴を買います。来週，パレゾーに行き，陶器についての私の本を探します。何か忘れていれば，もう一度言ってください。

2日間，病気でしたが，もう全快しました。あなたのお手紙が私の心に良い効果を与えるのですよ。あなたが私の質問に答えてくださったように率直に，どんなおたづねにも答えましょう。自分の全人生を話せるのは幸せなことではありませんか？　俗物（ブルジョア）たちが考えているよりはるかに簡単なことだし，友人に明かすことのできる秘密は常に，無関心な人間が推測することの反対ですよ。

この1週間，あなたの傍にいて大変幸せでした。何の気がかりもなく，快適な住まい，

美しい景色，愛情深い皆さん，そして，父親らしい何かを持った，あなたの美しく，率直な顔。年齢など問題ではありません。あなたの中に，無限の優しさにみちた庇護を感じるのです。ある晩，あなたが母上を私の娘と呼ばれたとき，私の目に涙が浮かびました。立ち去るのは私にとってつらいことでしたが，私はあなたがお仕事をなさるのを邪魔しておりました。それから，それから—私の老いゆえの病気，つまり，じっとしていられないことです。執着し過ぎて，うんざりさせることを心配しています。老人は，極度に慎みを持つべきです。遠くからであれば，私があなたをどれほど愛しているか，くどくどと繰り返すことを恐れずにあなたに言うことができます。あなたは，今もなお感じやすく，誠実で，芸術に恋しているものの，野心でゆがめられず，成功に酔ってもいない，まれな人間の１人ですよ。つまり，あなたは，最近の老いぼれた青年たちの主張するところでは，古びてしまった，あらゆる種類の思想で，いつまでも25歳でしょう。彼らにあっては，それは気取りだと私は思います，でも，愚かなことです。もしそれが無力だとすれば，さらにまずいことですよ。彼らは作家（オム・ド・レトル）ですが人間（オム）ではありません。

小説に励んでください。見事なものです，でも，奇妙ですね，あなたがお書きになるものからは浮かび上がることも，あらわになることもない，あなたの一面，おそらくはあなたも知らない何かがあります。それはもっと後に現れることでしょう，私は確信しています。

あなたを愛情をこめて抱擁します，お母さん（ママン）も，それから，魅力的な姪ごさんも，ああ！　忘れていました。今晩，クチュールに会いました。あなたの意にかなうために，私のと同様，鉛筆での肖像画をあなたのお望みの値段で描こうと言いました。私が有能な代理人であることがお分かりですね，私を雇ってくださいな[17]。

〔手紙31〕　フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ〕水曜日

〔1866年11月14—15日の夜〕

大切な先生

（…）

ブイエの成功について，先日，お伝えくださったのは大変ご親切です，それどころか，有用です。私に対して無用なものは１つとしてありません。そこにある洗練されたものを残らず感じました。偉大な心はこうした繊細さで明らかにされるのですね。

さようなら。あなたを愛しています，そしてあなたの両手，両頬，それに両目に口づ

けします。

Gve. フロベール[18]

〔手紙32〕 フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1866年11月17日〕

土曜日，朝

さて，デプリュノ氏はただちに勝訴しました！ 口頭弁論のあと，判決が開廷中に出されたのです。彼が今朝，この知らせを私に伝えてくれました。

あなたのお名前が少し役立ったことは確かだと思いますが？ 姪のカロリーヌは朝になるとすぐに活動を開始し，裁判官の心をとらえました。彼は（約束どおりに）同僚たちに話したはずです。こういうわけで一件落着しました。あなたはこれからはノルマンディー地方の人間というわけですね，大切な先生。夏毎にお目にかかれますね。

新聞に関する資料のことでお心を煩わせないでください。私の小説の中でそれはほんのわずかな場を占めるだけですし，時間的にもまだ待つことができますから。

けれども，何もなさることがないようなときに，48年についてあなたが思い出されることを私のためにどんな紙にでも結構です，書き留めてください。そして，話をしながら，それを私に敷衍してください。もちろん，写しをお願いしているのではありません，あなたの個人的な思い出を少しばかり集めてくだされば十分です。

『マクベス』でマックブルフを演じた，デュゲレというオデオン座の女優をご存じですか？ 彼女が『モン＝ルヴェシュ』のナタリーの役をやりたいと熱望しています。ジラルダン，デュマ，それに私が彼女をあなたに推薦いたします。私は『フォスティーヌ』で彼女を見ましたが，どこかあか抜けしていました。以上，お知らせしておきます。措置を講じられるのはあなたです。彼女は利発で，活用できる役者だと私は考えています。

あなたの若い技師が誓願を立て，そして，その誓願が彼に犠牲を強いるものでなければ，彼がそれを守るのはもっともです。そうでないなら，ここだけの話ですが，単なる愚挙でしかありません。「自由」は，もし「情熱」の中にないとすれば，どこに存在するというのでしょう？ 情事を妨げること，つまり，「本性」を抑えることだけに注意を払ったカトリック教義のおかげで，われわれは貞潔を重要視することになれすぎてしまったのです。われわれはこうした事柄にばかばかしいほどの重要性を与えています！もはや，唯心論者でも，唯物論者でもある必要はなく，自然主義者であるべきなので

す。イシスはビーナスと同様，聖母マリアの上にいるように私には思われます。

ところで，われわれの時代には，こうした誓願は立てませんでした。そして恋していました！　しかも，大胆に！　しかし，全てが広い折衷主義の中で結びついていました。そして，私が2年間（21歳から23歳まで）徹底して行ったように，ご婦人方から遠ざかったとすれば，まるで離れ業のようにそれは自尊心から，自分自身に対する挑戦からでした。そのあとで，反対の不節制に身を任せたのです。結局，われわれは，徹頭徹尾滑稽であったにしても，完全に開花したロマン主義者，左翼であったのです。私の中に残っているごくわずかの良いものはその時代のものです！

さようなら，大切な先生。心をこめてあなたを愛しています，そして，同じように心をこめてあなたを抱擁いたします。

Gve. フロベール

あなたの大切なお手紙の中で私に書いてくださったたくさんの甘い言葉であなたが私を甘やかしておられるのをご存じでしょうか[19]。

ジョルジュ・サンドはパリからパレゾーに移り，次の手紙をしたためた。パレゾーは，15年という長い歳月，生活を共にして来たアレクサンドル・マンソーと，その最後の1年間を過ごした，つまり，結核に冒されたマンソーを看取り，その死を凝視した家である。マンソーは前年の8月21日，息を引き取った。〔手紙27〕で親しい人間の突然の訃報に受けた衝撃を語っているが，ここでは，悲痛な思い出と静寂に満ちた家に1人残され，孤独感にすっぽり包まれた，老境にあるジョルジュ・サンドの心が際立つ。

〔手紙33〕　サンドよりフロベールへ

パレゾー，〔18〕66年11月22日

仕事を始める前に私の大切な仲間に夜の挨拶をすることが私に幸運をもたらすような気がします。

今，私の小さな家にたった1人です。庭師とその家族は庭のあずま屋に住んでいます。この家は村の一番外れにありますから，私達は素晴しいオアシスである田園の中に引きこもっているというわけです。ノルマンディー地方のような牧場や森やりんごの木があります。でも，汽笛が鳴り，船がすさまじい列なりを見せている大きな河はありません。

柳の木の下を音も立てずに流れている小川。静寂…ああ！　まるで原生林の奥深くにいるような気がします。聞こえるのは月光を浴びてダイアモンドを絶え間なく積み上げている泉の湧き出る小さな音だけ。部屋の隅で眠っていた蠅が暖炉の熱さに目を覚ます。そこで死を待つていたのですが，ランプに寄って来，狂ったような陽気さに取りつかれ，ぶんぶん音を立て，飛び跳ね，笑い，愛の淡い望みさえ抱きます。でも，今は死の時です。そして，ばたん！　踊りのさなかに，硬直して落下します。もう終わりです，さらば舞踏会！

私はここでやはり，悲しい思いでいます。私にとってはいつも無為であり，休息であった，この絶対的な孤独を今では，消え行くランプのようにここで亡くなった，そして変らず，ここにいる死者と分かちあっています。私は彼が住んでいる領域で彼を不幸だとは思いません。けれども，彼が私の周囲に残し，今では影でしかないこの似姿はもはや私に話しかけることができないのを嘆いているようです。大したことではありません！　悲しみは有害なものではありません。私達が無感動になることを妨げてくれますから。

ところであなたは，この時間，何をしておられますか？　同じように猛勉強し，同じように1人っきりですね。お母さん（ママン）はルーアンにいらっしゃるはずですから。そちらの夜も，きっと同じように美しいにちがいありません。《完全な愛を相変らず繰り返している，そしてこれからも語り続ける宿屋の掛け時計の老吟遊詩人》のことをあなたは時に思い浮かべてくださいますか？　さあ，ともかくも！　あなたは貞潔にご賛成ではありませんね，猊下。私としては，《老婆にも長所がある》と申し上げましょう！

それでは，あなたを心から抱擁いたします，そして，もしできれば，昔風に愛し合っている人々を語らせることにしましょう。

あなたが手紙を書きたい気分でないときに，私にお書きになる必要はありません。完全な自由なくして真の友情はありませんから。

来週はパリに，それから再びパレゾーに，それからノアンです。

月曜日の会でブイエに会いました。私は夢中になりました。でも，私達の中の誰かがマニー亭で事切れることでしょう。こんなに頑丈な私が冷や汗をかき，あたりが真っ青に見えましたから[20]。

〔手紙34〕　フロベールよりサンドへ

クロワッセ，火曜日５時

〔1866年11月27日〕

あなたはそちらで１人ぼっちで，悲しんでおられる，私もここで同様です。

ときどきわれわれを激しくとらえる陰うつな気分はどこから来るのでしょうか？　それは潮のように，満ちてきます。溺死するような気がします，逃げなければなりません。そういうとき，私は仰向けに寝て，何もしません。潮は過ぎてゆきます。

私の小説は目下，少しもはかどっていません。このことに，私が受け取った死の知らせを加えてみてください。コルムナン（25年に及ぶ友人です）の死，ガヴァルニの死，などなどです。やれやれ！　それもやがて終るでしょう。あなたは，１日中，頭を抱えこんで，たった１つの言葉を見つけるために哀れな頭を搾ることがどんなことかご存知ではありません。あなたにあっては，考えが豊かに，絶えず，河のように流れ出るのです。私の方は，それはちょろちょろ流れる水のようです。滝とするには大がかりな工事が必要なのです。ああ！　私は十分に知っていますよ，「文体の苦悩」を！　要するに，私は自分の心臓と脳みそをかじって人生を過ごしているのです。これがあなたの友人の正真正銘の本質です。

あなたはその友人に，《彼の掛け時計の老吟遊詩人》のことを時々，思い浮かべるかとおたずねになる。もちろん，その通りです！　そして彼はその老吟遊詩人を懐かしんでいますよ！　私達の夜のおしゃべりはひどく楽しいものでした。時々，大きな子供のようにあなたに口づけしてしまわないよう自分を抑えました。昨夜，きっと耳鳴りがしたことでしょう？　兄の家で，家族皆で食事をしました。ほとんどあなたのことだけが話題となり，誰も彼もがあなたをほめたたえました。もちろん，私は例外で，あなたを，大切な愛する先生を可能な限りけなしました。

あなたのこの前のお手紙のことで，（そして思考のごく自然な繋（つなが）りによって）モンテーニュ翁の『ウェルギリウスの詩句について』と題する章を読み返してみました。彼が貞潔について言っていることはまさしく私が信じていることです。美しいのは「努力」であり，「禁欲」それ自体ではありません。そうでないとしたら，カトリック教徒たちのように，肉体を呪わなければならないでしょう？　それがどこに至るかは神がご存じです！　従って，同じことばかり言う危険を冒して，また，プリュドムのような人間と思われる危険を冒して，私はあなたの青年が間違っていると繰り返して申し上げます。彼が20歳で肉欲を抑えているのであれば，50歳で下劣な好色漢になりましょう。何事にも報いはあるのです！　「偉大なる本性」―それは「善なる」ものです―は何よりもまず，

浪費家であり，自らを浪費するとき綿密に勘定しないのです。笑って，泣いて，愛して，働いて，楽しんで，そして苦労する，つまり，その全域で可能な限り感動することが必要なのです。これこそが真の人間らしさだと思います。

さようなら。心の平穏を保たれるよう努めてください。まもなくお孫さんに再会されますね。心が慰められることでしょう。そして，あなたを愛している，あなたに愛の言葉をお送りする，あなたの老人のことを考えてください。

Gve. フロベール[21]

フロベールは，ジョルジュ・サンドの創作した青年に見る〈純潔〉の問題を取り上げ，唯心論，唯物論をともにしりぞけ，本性の善なることを主張する。そして，ジョルジュ・サンドもまた投げ返された，その《重要な問題》[22]に対する見解を披瀝する。

〔手紙35〕 サンドよりフロベールへ

パレゾー，〔1866年〕11月30日

こうしたことについて言うべきことはたくさんありましょう。私のカスカレ―件(くだん)の婚約者の名です―は婚約者のために慎みます。彼女は彼に，「あなたが仕事の幾つかの課題を達成なさるのを待ちましょう。」と言い，彼は仕事をします。また，彼女は彼に，「お互いのために純潔を守りましょう。」と言い，彼は慎みます。彼を抑えているのはカトリック教の心霊主義ではありません，彼は愛情について大きな理想を抱いているのです。彼が良心と誇りにかけてその理想を守ろうとしているとき，それを捨てるよう，どうして助言を与えられましょう？ われわれの支配者である本性がわれわれの本能の中で示す均衡があり，本性は素早く，われわれの欲望の限界を定めます。偉大なる本性は最も強固なものではありません。非常に合理的な教育の力で，われわれはあらゆる方向に発達するわけではありません。いずれにしても，われわれは抑制され，われわれの根っこや枝を可能な所で，可能なやり方で伸ばします。それに偉大な芸術家は往々にして病弱であり，何人かは不能でした。欲望の強すぎる者は早く力尽きました。概して，われわれは激しすぎる喜びと苦悩を持っていると思います，頭脳を拷問にかけているわれわれは。昼も夜も大地と，そして妻を相手に過酷な仕事をしている百姓は，強い性質の人間ではありません。その頭脳は際立って虚弱です。あらゆる方向に発達する，とあなたはおっしゃっるのですね？ 一度に，ではなく，また，休息なし，でもありません，さあ！ 自慢する人間は少々，ほらを吹いているのですよ，つまり，全てを一度に行え

ば，全てを逃します。彼らにとって愛情が取るに足らないポトフであり，芸術が些細な生計の手段であるならば，それも結構でしょう。けれども，彼らが果てしない，無限に近い喜びと，情熱的な，熱狂に達する仕事を持っているとしても，彼らはその２つを覚醒と睡眠のように交互に行うわけではありません。同時にバイロンでもあるようなドン・ジュアンを私は信じないのです。ドン・ジュアンは詩を作りませんでしたし，バイロンは愛の行為がひどく下手だったということです。彼は何度か―こうした感動は人生で数えるほどに少ないものです―心と精神と官能から完璧な恍惚を体験したにちがいありません。愛を謳（うた）う詩人の１人になるのに十分な体験でした。われわれの楽器にはそれ以上，必要はありません。わずかな欲望の絶え間ない風でさえ，この楽器を壊してしまうでしょう。（真の）芸術家が主人公である小説をいつの日か試みてください。どれほど莫大な，とは言え，繊細で，抑制された活力があり，彼があらゆるものをどれほど注意深く，好奇心にみち，そして，落ち着いた目で見つめているか，また，彼が観察し，洞察する事物への衝動がどれほど稀であり，真剣であるかが，お分かりになるでしょう。さらに，彼が自分自身をどれほど恐れているか，身を任せれば必ず己れが消滅することをどれほど知っているか，自分の心の財産に対する深い慎みがそれらをまき散らし，浪費することをどれほど妨げているかが，お分かりになるでしょう。芸術家は創り出すのに余りにも美しい型ですから，私は一度として実際にやって見たことはありません。美しすぎ，また，複雑にすぎるこの人物に手をつける力が自分にあると感じられなかったのです。一女性にはあまりに高くを狙うことです。けれども，いつの日かあなたの心を駆り立てましょう。そして，それはやってみるだけの価値があることでしょう。モデルはどこにいるか？　私には分かりません。太陽の黒点を持たないような人間を深くは知りません。この芸術家が俗物に似通うなんらかの側面という意味ですが。あなたはおそらくこの黒点をお持ちではありません，あなた自身を描かれるべきでしょう。私の方はそれを持っています。分類が好きな私は教育家に近づき，裁縫したり，子供のお尻をふくことが好きな私は下女に近づきます。私はよく放心していますが，そんな私は白痴に近づきます。それから，結局のところ，私は完璧が好きではないのでしょう。私はそれを感じるのですが，表現することができないのです。芸術家の性質に欠点を与えることもできるでしょう，でも，どんな？　私達はいつかそれを探しましょう。それは目下のあなたの主題ではありませんから，私があなたの関心をそらすべきではありません。ご自身に対する厳しさを減じて，前進してください。そして霊感が全てを創造したとき，あなたは全体の調子をもう一度示し，前面に来るべきではないものを切り捨ててください。それは可能ではありませんか？　私は可能だと思います。あなたの書いておられるものはまるでよどみがなく，非常に豊かに見えます，それは絶えず繰り返される横溢で

す。私にはあなたの苦悩を理解することがとうしてもできません。

大切な弟，お休みなさい。あなたのご家族の皆様に愛を込めて。私はパレゾーのいつもの孤独に帰ってきました。私はこの孤独を愛しています。月曜日，パリに戻ります。

あなたを非常に強く抱擁します。大いに仕事をしてください。

G. サンド[23]

〔手紙36〕 フロベールよりサンドへ

土曜日，夜

〔クロワッセ，1866年12月15—16日〕

オデオン座で観客が満足しているのは結構なことです，大切な先生。私は『ヴィルメール』の再演を心待ちにしています。もちろん，初日に出かけます。それは4月ですね？ もっとも，大したことではありません，こちらにいようが，そちらにいようが，私は出かけますから。

ああ！ すぐに，私がそのことを忘れないうちに！ あなたが話しておられた靴屋の住所を教えてください。母がハーフブーツを焦がしてしまい，別のを作らせたいと思っているのです。

ボスケ嬢（『素晴しいノルマンディー地方』の著者です）が『育ちのよい女』という題の小説を出版しました。かなりのものがそこにきっとあるでしょう？ あなたに1部，献呈することを彼女に勧めることをあえてしました。何という文体でしょう!! 彼女のためにマリオ・プロトに記事を書くよう取りはからっていただけましたら，善行を施されることになりましょう。

さて，われわれの話をいたしましょう。市民ブイエが彼の美しい故郷で真の勝利を手にするのを目の当たりにしました。その時まで彼を徹底的に拒絶していた同郷人たちが，パリが拍手喝采するということで，熱狂して叫んでいるのです。彼のために催される宴会に出席するため，次の土曜日に彼が戻って来ます。少なくとも80人分の席が用意される，等々です！

ツバメのマレンゴのことでは，彼はあなたのために秘密を厳守して，件(くだん)の長文の手紙を驚いた様子で読んで見せましたから，私は一杯食わされました。かわいそうなマレンゴ！ あれは大物です！ あなたがどこかでお書きになるべきものですね？ この文体で書かれる彼の回想録はどんなものになるでしょう？

私の（文体）は些細なものではない難儀を次から次へと私に与えています。とは言え，

1か月後には最も無意味な箇所は通り過ぎていると期待しているのですが？　もっとも今は砂漠の中で途方に暮れています。結局のところ，神の御心のままに。仕方がありません！

生涯，二度と立ち返らずにすむならば，こうした仕事をどれほど喜んで放棄することでしょう！

近代の，フランスの俗物（ブルジョア）達を描くことは私には並外れて鼻持ちなりません！　それに今こそ生活を少しばかり楽しみ，作者の意に適（かな）う主題を選ぶべき時でしょう？

《自らの心で書くべきではない》とあなたに申し上げたとき，私は自分の気持ちを上手に表現できませんでした。作者は自らの個性を表面に出すべきではない，と言いたかったのです。偉大な芸術は科学的であり，作者個人を超越したものだと思います。精神の努力によって，「登場人物たち」の中に自らを移すべきであり，彼らを自分の方に引きつけてはなりません。以上が少なくとも，方法であり，それは結局，大いに才能を持ち，可能であれば，天分をも持つよう努力すべし，と言うことです。「詩論」も批評も一つ残らず，何という虚栄でしょう！　こうしたものを作り出す，権威ある諸氏の落ち着きぶりに私は驚嘆します。おお！　彼らに気詰まりを感じさせるようなものは全くないのですよ，この奇妙な奴らに！

あなたは時々，一般に広まっているような思想の共通の動向にお気づきになったことはありませんか？　たとえば，私は友人のデュ・カンが最近出した小説『失われた力』を読んだところです。それは多くの点で私が書いているものに類似しているでしょう？それ（彼の本）は，今日の若者たちにとっては正真正銘の化石になってしまった，われわれの世代の人間に対する的確な見解を与えてくれる非常に素朴な本です。48年の「反動」は2つのフランスの間に深い溝を掘ったのです。

追伸。あなたは私のために題名を見つけてくださいましたか？　それは容易なことではありません。確かに。

今，どこにいらっしゃるのです？　パリ，それともノアンでしょうか？

あなたはご自分を《木でできた女》だと言明しておられますが，最近のマニー亭での会食でひどくお具合が悪かったと，ブイエから聞きました。とんでもありません，あなたは木でできてはいません，大切な，優しい，大きな心！　愛されている老吟遊詩人。

劇場でアルマンゾルの名誉を回復させるのはきっと時宜を得たことでしょう？　彼が縁なし帽をかぶり，ギターを手にし，あんず色のチュニックを着て，岩の上から，黒服に身を包んだ株式仲買人たちを罵倒している姿が目に浮かびます。演説は立派なものになりましょう。

それではお休みなさい。愛情をこめてあなたの両頬に口づけします。

Gve. フロベール[24]

〔手紙37〕 サンドよりフロベールへ

月曜日

〔パリ，1866年12月17日〕

(…) あなたの老吟遊詩人は今日は再び死んだようになっています。それでも，今晩はマニー亭に出かけましょう。(…)

もっともすべてうまくいっています，土曜日，ノアンに向けて発ちます。(…)[25]

〔手紙38〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ，木曜日

〔1866年12月27日〕

ところで，大切な先生，ノアンに帰られてから，お元気になられたでしょうか？ まず，どんな病気にかかっておられるのです？ 一体，何なのです？ 可愛らしいオロールを目になさったことが良い効果を与えたにちがいありませんね？

1867年には，あなたのために何を望めばいいでしょう？ 第一に，あらゆるものを，次に，残りのものを。その中で，私は『モン＝ルヴェシュ』の100回の上演を求めます。

あなたにお会いできず，寂しいということ以外，あなたもよくご存知のように，申し上げることはまったく何もありません。それだけです。

あなたはそちらにどれくらい滞在なさるのです？ つまり，いつパリにお戻りですか？ 私の方は2月の半ば頃，パリに行く予定です。

私の近くにあなたがいらっしゃらないので，私はあなたの作品を読んでいます。より正確に言えば，読み返しています。かって，『ルヴュ・アンデパンダント』誌でむさぼるように読んだ『コンシュエロ』を手に取りました。私は再び，夢中になりました。何という才能，まったく！ 何という才能！ これは，《静まり返った書斎》の中で，私が時おり発する叫びです。ポルポラがコンシュエロの額にした口づけに，私は先ほど本当に涙を流しました…あなたをなぞらえるのにアメリカの大きな河より適切なものを見つけることが私にはできません。「巨大さ」と「優しさ」です。

ヴィヨという名の偉大な人物の『におい』はまだ読んでいません。あなたに対する悪

口がなければ，不完全ですね。それにしても，才気ある人士がこうしたすべてを賞賛するのです！　おお！　聖ポリュカルポスよ！

さようなら。私は自分があまりにも愚鈍に感じられ，あなたを悲嘆にくれさせるのではないかと心配になります。ですから，これでやめます。おたよりをください，そして，時々，私のことを考えてください。

愛情をこめてあなたを抱擁いたします。

あなたの年老いた

Gve. フロベール

モーリス夫人は，もう随分以前に，チーズをお受け取りのことでしょう？

ああ！　プシェ神父からの伝言を忘れていました。つまり，神父はあなたが眼前にいることにすっかり動転して，あなたの作品を並外れて賛美しているばかりか，ご子息の作品をも賞賛していることをあなたに言うのを忘れてしまったとのことです。（彼は楽しい気分になりたくなると，『仮面と顔』を開くのです。）そして彼はあの日，剃(そ)っていなかったひげを消したのです。おお！[26]

—— 続 ——

〈注〉

使用したテクストは以下の版である。

—*George Sand Corrspondance,*

(édition de Georges Lubin, Classiques Garnier 1964–1995)

—*Gustave Flaubert Correspondance*

(édition du Club de l'Honnête Homme, 1975)

—*Correspondance Flaubert–George Sand*

(édition d'Alphonse Jacobs, Flammarion, 1981)

1.

Nohant, La Châtre – Indre 28 7bre [1866].

C'est convenu, cher camarade et bon ami. Je ferai mon possible pour être à Paris à la

représentation de la pièce de votre ami, et j'y ferai mon devoir fraternel comme toujours; après quoi, nous irons chez vous et j'y resterai huit jours, mais à la condition que vous ne vous dérangerez pas de votre chambre. Ça me désole de déranger, et je n'ai pas besoin de tant de Chinois pour dormir. Je dors partout, dans les cendres ou sous un banc de cuisine, comme un chien de basse-cour. Tout est reluisant de propreté chez vous, donc on est bien partout. (…) nous bavarderons, vous et moi, tant et plus. S'il fait beau, je vous forcerai à courir. S'il pleut toujours, nous nous cuirons les os des guiboles en nous racontant nos peines de cœur. (…) d'année en année, on change. L'âge donne sans cesse un autre caractère à la figure des gens qui pensent et cherchent, c'est pourquoi leurs portraits ne se ressemblent pas et ne leur ressmblent pas longtemps. Je rêvasse tant, et je vis si peu que je n'ai parfois que trois ans. Mais le lendemain j'en ai trois cents, si la rêverie a été noire. N'est-ce pas la même chose pour vous? Ne vous semble-t-il pas par moments que vous commencez la vie sans même savoir ce que c'est, et d'autres fois, ne sentez-vous pas sur vous le poids de plusieurs milliers de siècles, dont vous avez le souvenir vague et l'impression douloureuse? D'où venons-nous et où allons-nous? Tout est possible, puisque tout est inconnu.

(éd. G. Lubin, tome XX. pp. 129-130)

2.

Nohant, 19 8bre [1866].

Cher ami, on m'écrit de l'Odéon que la pièce de Bouilhet est pour le 27. Je dois être à Paris le 26. Des affaires m'y appellent dans tous les cas. Je dînerai chez Magny ce jour-là et le lendemain, et le surlendemain. Donc vous saurez où me prendre, car je pense que vous venez pour la 1re représentation. A vous de cœur toujours et tout plein.

G. Sand.

(ibid. p. 150)

3.

[Croisset] dimanche matin

[21 octobre 1866]

Chère maître,

La Conjuration d'Amboise est affichée ou va être affichée pour samedi prochain mais en réalité ne sera jouée que le lundi 29. On compte sur vous, bien ententu [*sic*].

Je serai au *boulevard du Temple 42* dès mercredi soir.

Donc à bientôt. Je vous embrasse et suis

votre

Gve Flaubert.

Nous reviendrons ici tous les deux à la fin de l'autre semaine, c'est-à-dire vers le 2 ou le 3 novembre. Alors on causera tranquillement, longuement et solidement.

(éd. A. Jacobs, p. 85)

4.

[Nohant, 23 octobre 1866].

Cher ami, puisque la pièce est pour le 29 je donne deux jours de plus à mes enfants et je pars d'ici le 28. Vous ne m'avez pas dit si vous vouliez dîner avec moi et votre ami, le 29, en camarades, chez Magny, de bonne heure, à l'heure qu'il voudra. Faites que je trouve un mot de réponse rue des Feuillantines 97, le 28.

Nous irons ensuite chez vous, le jour que vous voudrez. Ma grande causerie avec vous, sera de vous écouter et de vous aimer de tout mon cœur. Je vous porterai ce que j'ai en *train,* ça me *baillera couraige,* comme on dit chez nous, de vous lire mon *fœtus.* Si je pouvais vous porter le soleil de Nohant! Il est splendide!

Je vous embrasse et vous bénis.

G. Sand.

(op. cit. tome XX, pp. 154–155)

5.

[Paris], samedi matin [27 octobre 1866].

Chère maître,

On ne dine pas le jour d'une première quand on est très nerveux et qu'on a à soigner un autre nerveux. Merci donc pour nous deux. J'espère, néanmoins, vous voir, pendant un entr'acte, dans la petite loge ci-jointe.

Nous dînerons et nous causerons tranquillement à Croisset vers jeudi ou vendredi.

D'ici là mille tendresses de votre

(éd. Club de l'Honnête Homme, tome 14, p. 301)

6.

[Paris, 28 octobre 1866].

Arrivée en bon état à 4 1/2, un peu froid. (…)

–Demain celle de Bouilhet. J'ai trouvé une lettre de Marchal avec la loge. Nous y allons avec *Popote.*

(op. cit., tone XX, p. 157)

7. Lundi 29——Paris

(…) Dîner chez Magny avec Marchal. Ensuite à l'Odéon, 1re de *La Conjuration d'Amboise* par Louis Bouilhet. Grand succès, jolie pièce, vers exquis, bien jouée. (…) Je vas dans le foyer à tous les entr' (entr' actes) actes et après. Je vois tout le monde : Girardin, Vaquerie (*sic*), Meurice, St-Victor, etc., etc. Flaubert et Bouilhet sont heureux et charmants dans la joie, bien méritée.

(*L'Agenda* de 1866, *Présence de George Sand, N°* 30, p. 51, novembre 1987)

8.

Jeudi midi [Ier novembre 1866]. Boulevard du Temple, 42.

Chère maître,

Ma mère nous attend toujours *samedi* prochain.

Donc comme le train express part à une heure très précise, je serai sur le trottoir à midi et demi.

C'est convenu. Pas n'est besoin de réponse.

Mille tendresses de votre

(op. cit., tone 14, p. 502)

9. Dimanche 4——Rouen

(…) Gustave me lit ensuite la féérie. C'est plein de choses admirables et charmantes, trop long, trop riche, trop plein. Nous causons encore à 2 h 1/2. J'ai faim, nous descendons chercher du poulet froid à la cuisine. Nous sortons un[e] tête dans la cour pour chercher de l'eau à la pompe. Il fait doux comme au printemps. Nous mangeons, nous remontons, nous fumons, nous recausons, nous nous quittons à 4h du matin.

(op. cit., p. 52)

10. Lundi 5——Rouen

Toujours un temps délicieux. Après déjeuner nous allons nous promener. J'entraîne Gustave qui est héroïque. Il s'habille et il me conduit à Canteleu ; c'est à deux pas, en haut de la côte. Quel adorable pays, quelle douce, large et belle vue ! (…)

Nous rentrons à 3 h. Je travaille ; après dîner recauserie avec Gustave. Je lui lis *Cadio*. Nous recausons et nous soupons d'une grappe de raisin et d'une tartine de confitures.

(ibid.)

11. Mercredi 7——Rouen

Temps gris, pas froid ; tour de jardin, travail à *Mont-Revêche*. Journée raisonnable. Le soir Flaubert me lit la l^re^ partie de son roman, c'est bien, bien. Il lit depuis 10 h jusqu'à 2. Nous causons jusqu'à 4.

(ibid.)

12. Jeudi 8——Rouen

Même temps gris, tour de jardin, travail, dîner, causerie, lecture du roman de Flaubert, causerie.

(ibid.)

13.

Paris, samedi soir [10 novembre 1866].

En arrivant à Paris j'apprends une triste nouvelle. Hier soir pendant que nous causions, – et je crois qu'avant-hier nous avions parlé de lui – mourait mon ami Charles Duveyrier, le plus tendre cœur et l'esprit le plus naïf. On l'enterre demain ! Il avait un an de plus que moi. Ma génération s'en va pièce à pièce. Lui survivrai-je ? Je ne le désire pas ardemment, surtout les jours de deuil et d'adieux. C'est comme Dieu voudra, à condition qu'il me permette d'aimer toujours dans cette vie et dans l'autre. Je garde aux morts une vive tendresse, mais on aime les vivants autrement. Je vous donne la part de mon cœur qu'il

avait, ce qui, joint à celle que vous avez, fait une grosse part. Il me semble que ça me console de vous faire ce cadeau-là. Littérairement ce n'était pas un homme de l^er^ ordre, on l'aimait pour sa bonté et sa spontanéité. Moins occupé d'affaires et de philosophie, il eût eu un talent charmant. Il laisse une jolie pièce, *Michel Perrin.*

J'ai fait la moitié de la route seule, pensant à vous, à la maman, à Croisset et regardant la Seine qui grâce à vous est devenue une *divinité* amie. Après cela j'ai eu la société d'un particulier et de deux femmes d'une bêtise bruyante et fausse comme la musique de la pantomime de l'autre jour. Ex[emple]. 〈J'ai regardé le soleil, ça m'a laissé comme deux points dans les yeux〉. —*Le mari* : 〈Ça s'appelle des points lumineux〉. Et ainsi pendant une heure sans débrider.

Je ferai toutes les commissions de *la maison,* car j'en suis, n'est-ce pas ? Je vas dormir toute cassée, j'ai pleuré comme une bête toute la soirée, et je vous embrasse d'autant plus cher ami. Aimez-moi *plus* qu'avant, puisque j'ai de la peine.

G. Sand.

Avez-vous un ami dans les magistrats de Rouen ?

Si oui, écrivez-lui un mot pour qu'il prenne note de ce *nom-ci ; Amédée Despruneaux.* C'est une cause civile qui viendra à Rouen d'un jour à l'autre. Faites savoir que ce *Despruneaux* est le plus honnête homme du monde. Vous en pouvez répondre comme de moi.

En faisant ceci – si la chose est faisable – vous me rendrez personnellement service. A charge de revanche pour vos amis.

(op. cit., tome XX, pp. 172-173)

14.

[Paris, 11 novembre 1866.]

Je crois que je vous ferai plaisir et joie en vous disant que la 〈conjuration *d'Ambroise,*〉 ainsi s'exprime mon portier, s'annonce comme un véritable succès d'argent. Il y avait ce soir une queue comme à *Villemer,* et Magny qui est aussi un baromètre, est au beau.

Ainsi soyez content. Si cela se soutient, Bouilhet est à flot.

G. S.

(ibid. p. 174)

15.

[Paris,] samedi soir [10 novembre 1866].

(…) Je n'ai pas été à l'abbaye de Jumièges. J'ai travaillé. J'ai refait mon 4me acte. J'ai lu *Cadio,* ce qu'il y a de fait, à Flaubert, ça lui a plu. Il m'a lu ce qu'il a fait de son roman. C'est *très, très* bien. Nous avons causé, causé. (…) On a reçu l'ananas hier soir, il était délicieux et Flaubert a déclaré n'en avoir jamais mangé de si bons.

(ibid. p. 171)

16.

[Croisset], nuit de lundi [12–13 novembre 1866].

Vous êtes triste, pauvre amie et chère maître ; c'est à vous que j'ai pensé en apprenant la mort de Duveyrier. Puisque vous l'aimiez, je vous plains. Cette perte-là s'ajoute aux autres. Comme nous en avons dans le cœur, de ces morts ! Chacun de nous porte en soi sa nécropole.

Je suis tout *dévissé* depuis votre départ ; il me semble que je ne vous ai pas vue depuis dix ans. Mon unique sujet de conversation avec ma mère est de parler de vous ; tout le monde ici vous chérit.

Sous quelle constellation êtes-vous donc née pour réunir dans votre personne des qualités si diverses, si nombreuses et si rares ?

Je ne sais pas quelle espèce de sentiment je vous porte, mais j'éprouve pour vous une tendresse *particulière* et que je n'ai ressentie pour personne jusqu'à présent. Nous nous entendions bien, n'est-ce pas ? C'était gentil. C'était même si bon que je désire n'en pas faire jouir les autres. Si vous vous servez de Croisset dans quelque livre, déguisez-le pour qu'on ne le reconnaisse pas. Ça m'obligera. Le souvenir de votre présence ici est pour nous deux, pour moi. Tel est mon égoïsme.

Je vous ai surtout regrettée hier soir à dix heures. Il y a eu un incendie chez mon marchand de bois. Le ciel était rose et la Seine couleur de sirop de groseille. J'ai travaillé aux pompes pendant trois heures et je suis rentré aussi affaibli que le Turc de la girafe.

Qu'ont dit de votre pièce Chilly et Duquesnel ? Quand la jouera-t-on ? Qu'allez-vous faire maintenant ? Vos *Scènes de la Révolution*, sans doute ? etc. etc.

Un journal de Rouen, *Le Nouvelliste*, a relaté votre visite dans Rouen, si bien que samedi, après vous avoir quittée, j'ai rencontré plusieurs bourgeois indignés contre moi parce que je ne vous avais pas exhibée. Le plus beau mot m'a été dit par un ancien sous-préfet : 《Ah ! si nous avions su qu'elle était là…nous lui aurions…nous lui aurions…》 —— un temps de cinq minutes, il cherchait le mot—— 《nous lui aurions…souri !》 C'eût été bien peu, n'est-ce pas ?

A propos de magistrat, il faudrait m'envoyer une indication plus détaillée pour l'affaire Despruneaux. Quelle est son affaire ? Quand passe-t-elle ? Est-ce en appel ou en première instance ? Je ferai tout ce que je pourrai, soyez sans crainte.

Vous aimer 《plus》 m'est difficile, mais je vous embrasse bien tendrement. Votre lettre de ce matin, si mélancolique, a été au *fond*. Nous nous sommes séparés au moment où il allait nous venir sur les lèvres bien des choses ! Toutes les portes, entre nous deux, ne sont pas encore ouvertes. Vous m'inspirez un grand respect et je n'ose pas vous faire de questions.

Adieu. Je baise votre belle et bonne mine et suis votre

(op. cit., tome 14, pp. 303–304)

17.

[Paris], nuit de mardi à mercredi [13–14 novembre 1866].

Je n'ai pas encore lu ma pièce. J'ai encore quelque chose à refaire, rien ne presse. Celle

de Bouilhet va admirablement bien, et on m'a dit que celle de mon petit ami Cadol viendrait ensuite. Or, pour rien au monde je ne veux passer sur le corps de cet enfant. Cela me remet assez loin et ne me contrarie *ni ne me nuit* en rien. Quel style! heureusement je n'écris pas pour Buloz. J'ai vu votre ami, hier soir, au foyer de l'Odéon. Je lui ai serré les mains. Il avait l'air heureux. Et puis j'ai causé avec Duquesnel, de *la féérie.* Il a grande envie de la connaître, vous n'avez qu'à vous montrer quand vous voudrez vous en occuper: vous serez reçu à bras ouverts. Mario Proth me donnera demain ou après-demain les renseignements exacts sur la transformation du journal. Demain je sors, et j'achète les souliers de votre chère maman, la semaine prochaine je vas à Palaiseau et je cherche mon livre sur la faïence. Si j'oublie quelque chose, rappelez-le-moi.

J'ai été malade deux jours. Je suis guérie. Votre lettre m'apporte du bien au cœur. Je répondrai à toutes les questions, tout bonnement comme vous avez répondu aux miennes. On est heureux, n'est-ce pas, de pouvoir dire toute sa vie? C'est bien moins compliqué que ne le croient les bourgeois, et les mystères que l'on peut révéler à l'ami sont toujours le contraire de ce que supposent les indifférents.

J'ai été très heureuse pendant ces huit jours auprès de vous, aucun souci, un bon nid, un beau paysage, des cœurs affectueux et votre belle et franche figure qui a quelque chose de paternel. L'âge n'y fait rien, on sent en vous une protection de bonté infinie, et un soir que vous avez appelé votre mère *ma fille*, il m'est venu deux larmes dans les yeux. Il m'en a coûté de m'en aller, mais je vous empêchais de travailler, et puis, et puis – une maladie de ma vieillesse, c'est de ne pas pouvoir tenir en place. J'ai peur de m'attacher trop et de lasser. Les vieux doivent être d'une discrétion extrême. De loin je peux vous dire combien je vous aime sans craindre de rabâcher. Vous êtes un des *rares* restés impressionnables, sincères, amoureux de l'art, pas corrompus par l'ambition, pas grisés par le succès. Enfin vous aurez toujours 25 ans par toutes sortes d'idées qui ont vieilli, à ce que prétendent les séniles jeunes gens de ce temps-ci. Chez eux je crois bien que c'est une pose, mais elle est bête. Si c'est une impuissance, c'est encore pis. Ils sont *hommes de lettres* et pas *hommes.*

Bon courage au roman. Il est exquis, mais c'est drôle, il y a tout un côté de vous qui ne se révèle ni ne se trahit dans ce que vous faites, quelque chose que vous ignorez probablement. Ça viendra plus tard, j'en suis sûre.

Je vous embrasse tendrement et la maman aussi, et la charmante nièce. Ah! j'oubliais, j'ai vu Couture ce soir, il m'a dit que pour vous être agréable, il ferait votre portrait au crayon, comme le mien, pour le prix que vous voudriez fixer. Vous voyez que je suis bon commissionnaire. Employez-moi.

(op. cit., tome XX, pp. 180-182)

18.

[Croisset] , nuit de mercredi [14-15 novembre 1866].

(…) C'est bien gentil, mieux que ça, c'est *bon* de m'avoir envoyé ce mot de l'autre jour sur le succès de Bouilhet, rien n'est perdu avec moi. J'ai senti tout ce qu'il y avait de raffiné là-dedans. Les grands cœurs se dénotent par ces délicatesses.

Adieu, je vous aime, et je vous baise les deux mains, les deux joues et les deux yeux.

(op. cit., tome 14, p. 304)

19.

[Croisset], samedi matin [17 novembre 1866].

Eh bien, le Despruneaux a gagné son procés——d'emblée! Le jugement ayant été rendu séance tenante après les plaidoiries. Il m'annonce cette nouvelle ce matin.

Je ne doute pas que votre nom ne lui ait un peu servi! Ma nièce Caroline s'était mise en marche dès le matin et avait séduit un conseiller. Il a dû (selon sa promesse) en parler à ses confrères. Ainsi, c'est fini. Vous serez Normande, chère maître, et on vous verra tous les étés.

Ne vous tourmentez pas pour les renseignements relatifs aux journaux. Ça occupera peu de place dans mon livre et j'ai le temps d'attendre. Mais quand vous n'aurez rien à faire, jetez-moi sur un papier quelconque ce que vous vous rappelez de 48. Puis, vous me développerez cela en causant. Je ne vous demande pas de la copie, bien entendu, mais de recueillir un peu vos souvenirs personnels.

Connaissez-vous une actrice de l'Odéon qui a joué Macdulf dans *Macbeth,* Duguéret? Elle voudrait bien avoir dans *Mont-Revêche* le rôle de Nathalie. Elle vous sera recommandée par Girardin, Dumas et moi. Je l'ai vue hier dans *Faustine*, où elle a montré du chien. Vous êtes donc prévenue ; à vous de prendre vos mesures. Mon opinion est qu'elle a de l'intelligence et qu'on en peut tirer parti.

Si votre petit ingénieur a fait un *vœu*, et que ce vœu-là ne lui coûte pas, il a raison de le tenir; sinon, c'est une pure niaiserie, entre nous. Où la liberté existera-t-elle, si ce n'est dans la passion? Le catholicisme qui n'a songé qu'à empêcher la gaudriole, c'est-à-dire à restreindre la Nature, nous a trop habitués à faire cas de la chasteté. Nous donnons à ces choses-là une importance grotesque! Il ne faut plus être ni spiritualiste ni matérialiste, mais *naturaliste.* Isis me paraît au-dessus de la Vierge comme de Vénus.

Eh bien, non! *De mon temps,* nous ne faisions pas de vœux pareils et on était amoureux! et crânement! Mais tout s'associait dans un large éclectisme, et si l'on s'écartait *des dames* (comme je l'ai fait absolument pendant deux ans, de 21 à 23 ans), c'était par orgueil, par défi envers soi-même, comme tour de force. Après quoi on se livrait aux excès contraires. Enfin, nous étions des romantiques rouges, d'un ridicule accompli, mais d'une efflorescence complète. Le peu de bon qui me reste vient de ce temps-là!

Adieu, ma chère maître. Je vous aime tendrement et vous embrasse de même.

(ibid., p. 306)

20.

[Palaiseau, nuit du 21 au 22 novembre 1866].

Il me semble que ça me portera bonheur de dire bonsoir à mon cher camarade avant de me mettre à l'ouvrage.

Me voilà *toute seule* dans ma maisonnette. Le jardinier et son ménage logent dans le pavillon du jardin, et nous sommes la dernière maison au bas du village, tout isolés dans la campagne qui est une oasis ravissante, des prés, des bois, des pommiers comme en Norman-

die, pas de grand fleuve avec ses cris de vapeur et sa chaîne infernale ; un ruisselet qui passe muet sous les saules ; un silence ah ! mais il me semble qu'on est au fond de la forêt vierge, rien ne parle que le petit jet de la source qui empile sans relâche des diamants au clair de la lune. Les mouches endormies dans les coins de la chambre se réveillent à la chaleur de mon feu. Elles s'étaient mises là pour mourir, elles arrivent auprès de la lampe, sont prises d'une gaîté folle, elles bourdonnent, elles sautent, elles rient, elles ont même des velléités d'amour, mais c'est l'heure de mourir, et, paf ! au milieu de la danse, elles tombent roide, c'est fini, adieu le bal !

Je suis triste ici tout de même. Cette solitude absolue qui a toujours été pour moi vacance et récréation, est partagée maintenant par un mort qui a fini là, comme une lampe qui s'éteint, et qui est toujours là. Je ne le tiens pas pour malheureux dans la région qu'il habite ; mais cette image qu'il a laissée autour de moi, qui n'est plus qu'un reflet, semble se plaindre de ne pouvoir plus me parler.

N'importe ; la tristesse n'est pas malsaine, elle nous empêche de nous dessécher.

Et vous, mon ami ? que fais-tu à cette heure ? La pioche aussi, seul aussi ; car la maman doit être à Rouen. Ça doit être beau aussi, la nuit, là-bas. Y penses-tu quelquefois au vieux troubadour de pendule d'auberge, qui toujours chante et chantera le parfait amour ? Eh bien oui. quand même ! Vous n'êtes pas pour la chasteté monseigneur, ça vous regarde. Moi, je dis *qu'elle a du bon, la rosse !*

Et, sur ce, je vous embrasse de tout mon cœur et je vas faire parler si je peux, des gens qui s'aiment à la vieille mode.

G. Sand.

Tu n'es pas forcé de m'écrire quand tu n'es pas en train. Pas de vraie amitié sans liberté *absolue.*

A Paris, la semaine prochaine, et puis à Palaiseau encore, et puis à Nohant.

J'ai vu Bouilhet au *lundi.* J'en suis *éprise.* Mais quelqu'un de nous claquera chez Magny. J'y ai eu une sueur froide, moi si solide, et j'y ai vu tout bleu.

(ibid., tome XX, pp. 196–197)

21.

Croisset, mardi, 5 heures, [27 novembre 1866].

Vous êtes seule et triste là-bas, je suis de même ici. D'où cela vient-il, les accès d'humeur noire qui vous envahissent par moments ? Cela monte comme une marée, on se sent noyé, il faut fuir. Moi, je me couche sur le dos. je ne fais rien, et le flot passe.

Mon roman va très mal pour le quart d'heure. Ajoutez à cela des morts que j'ai apprises : celle de Cormenin (un ami de vingt-cinq ans), celle de Gavarni, et puis tout le reste ; enfin, ça se passera. Vous ne savez pas, vous, ce que c'est que de rester toute une journée la tête dans ses deux mains à pressurer sa malheureuse tête pour trouver un mot. L'idée coule chez vous largement, incessamment, comme un fleuve. Chez moi, c'est un mince filet d'eau. Il me faut de grands travaux d'art avant d'obtenir une cascade. Ah ! je les aurai connues, les *affres du style* !

Bref, je passe ma vie à me ronger le cœur et la cervelle ; voilà le vrai *fond* de votre ami.

Vous lui demandez s'il pense quelquefois à《son vieux troubadour de pendule》, mais je crois bien! Et il le regrette. C'était bien gentil, nos causeries nocturnes (il y avait des moments où je me retenais pour ne pas vous *bécoter* comme un gros enfant). Les oreilles ont dû vous corner hier soir. Je dînais chez mon frère avec toute la famille. Il n'a guère été question [que] de vous, et tout le monde chantait vos louanges, si ce n'est moi, bien entendu, qui vous ai débinée le plus possible, chère maître bien-aimée.

J'ai relu, à propos de votre dernière lettre (et par une filière d'idées toute naturelle), le chapitre du père Montaigne intitulé《quelques vers de Virgile》. Ce qu'il dit de la chasteté est précisément ce que je crois. C'est l'effort qui est beau et non l'abstinence en soi. Autrement il faudrait maudire la chair, comme les catholiques. Dieu sait où cela mène! Donc, au risque de rabâcher et de paraître un Prudhomme, je répète que votre jeune homme a tort. S'il est continent à vingt ans, ce sera un ignoble paillard à cinquante. Tout se paye! Les grandes natures, qui sont les bonnes, sont avant tout prodigues et n'y regardent pas de si près à se dépenser. Il faut rire et pleurer, aimer, travailler, jouir et souffrir, enfin vibrer autant que possible dans toute son étendue. Voilà, je crois, le vrai humain.

Adieu. Tâchez de vous tenir en sérénité. Vous allez revoir bientôt votre petite fille. Cela vous fera du bien. Et pensez à votre vieux qui vous aime et vous envoie mille tendresses.

(op. cit., tome 14, p. 308)

22. of. lettre à Gustave Flaubert, le 29 nov. 1866

(op. cit, time XX. p. 205)

23.

Palaiseau, 30 9bre [1866].

Il y aurait bien à dire sur tout ça, mon camarade. Mon *Cascaret,* — j'appelle ainsi le fiancé en question —, se garde pour sa fiancée. Elle lui a dit : Attendons que vous ayez réalisé certaines questions de travail. Et il travaille. Elle lui a dit : gardons nos puretés l'une pour l'autre, et il se garde. Ce n'est pas le spiritualisme catholique qui l'étouffe, mais il se fait un grand idéal de l'amour, et pourquoi lui conseillerait-on d'aller le perdre quand il met sa conscience et son mérite à le garder?

Il y a un équilibre que la nature, notre souveraine, met elle-même dans nos instincts et elle pose vite la limite de nos appétits. Les grandes natures ne sont pas les plus robustes. Nous ne sommes pas développés dans tous les sens par une éducation bien logique. On nous comprime de toutes façons et nous poussons nos racines et nos branches où et comme nous pouvons. Aussi les grands artistes sont-ils souvent infirmes, et plusieurs ont été impuissants. Quelques-uns trop puissants par le désir se sont épuisés vite. En général, je crois que nous avons des joies et des peines trop intenses nous qui travaillons du cerveau. Le paysan qui fait nuit et jour une rude besogne avec la terre et avec sa femme, n'est pas une nature puissante. Son cerveau est des plus faibles. Se développer dans tous les sens, vous dites? Pas à la fois, ni sans repos, allez! Ceux qui s'en vantent blaguent un peu, ou s'ils mènent tout à la fois, tout est manqué. Si l'amour est pour eux un petit pot-au-feu, et

l'art un petit gagne-pain, à la bonne heure ; mais s'ils ont le plaisir immense, touchant à l'infini, et le travail ardent, touchant à l'enthousiasme, ils ne les alternent pas comme la veille et le sommeil.

Moi je ne crois pas à ces Don Juan qui sont en même temps des Byron. Don Juan ne faisait pas de poèmes et Byron faisait, dit-on, bien mal l'amour. Il a dû avoir quelquefois – on peut compter ces émotions-là dans la vie – l'extase complète par le cœur, l'esprit et les sens ; il en a connu assez pour être un des poètes de l'amour. Il n'en faut pas davantage aux instruments d[e notre] vibration. Le vent continuel des [petits] appétits les briserait. Essayez quelque jour de faire un roman dont l'artiste (le vrai) sera le héros, vous verrez quelle sève énorme, mais délicate et contenue, comme il verra toutes choses d'un œil attentif, curieux et tranquille, et comme ses entraînements vers les choses qu'il examine et pénètre seront rares et sérieux. Vous verrez aussi comme il se craint lui-même, comme il sait qu'il ne peut se livrer sans s'anéantir, et comme une profonde pudeur des trésors de son âme, l'empêche de les répandre et de les gaspiller. – L'artiste est un si beau type à faire, que je n'ai jamais osé le faire réellement. Je ne me sentais pas digne de toucher à cette figure trop belle et trop compliquée, c'est viser trop haut pour une simple femme. Mais ça pourra bien vous tenter quelque jour, et ça en vaudra la peine.

Où est le modèle ? Je ne sais pas, je n'en ai pas connu *à fond* qui n'eût quelque tache au soleil, je veux dire quelque côté par où cet artiste touchait à l'épicier. Vous [n'avez] peut-être pas cette tache, vo[us devriez vous] peindre. Moi, je l'ai. J' [aime les] classifications je touche au pédagogue. J'aime à coudre et à torcher les enfants, je touche à la servante. J'ai des distractions et je touche à l'idiot. Et puis enfin, je n'aimerais pas la perfection, je la sens et ne saurais la manifester. Mais on pourrait bien lui donner des défauts dans sa nature : quels ? Nous chercherons ça quelque jour. Ça n'est pas dans votre sujet actuel et je ne dois pas vous en distraire. Ayez donc moins de cruauté envers vous. Allez maintenant de l'avant, et quand le souffle aura tout produit, vous remonterez le ton général et sacrifierez ce qui ne doit pas venir au premier plan. Est-ce que ça ne se peut pas ? Il me semble que si. Ce que vous faites paraît si facile, si abondant, c'est un trop-plein perpétuel. Je ne comprends rien à votre angoisse. – Bonsoir, cher frère. Mes tendresses à tous les vôtres. Je suis revenue à ma solitude de Palaiseau. Je l'aime. Je m'en retourne à Paris lundi. Je vous embrasse bien fort. Travaillez bien.

G. Sand.

(ibid., pp. 209-211)

24.

Croisset, nuit de samedi [décembre 1866]

Tant mieux qu'on soit content à l'Odéon, chère maître.

Je m'attends à un re-*Villemer* et serai, bien entendu, à la première. C'est pour le mois d'avril, n'est-ce pas ? Au reste, peu importe : que je sois ici ou là-bas, j'irai.

Ah ! tout de suite, pendant que j'y songe : donnez-moi l'adresse de votre fameux cordonnier. Ma mère a brûlé ses bottines et voudrait s'en faire faire d'autres.

Mlle Bosquet (l'auteur de la *Normandie merveilleuse*) a publié un roman intitulé : *Une*

femme bien élevée. Il y a certainement là-dedans quelque chose. Je me suis permis *de* lui conseiller *de* vous offrir un exemplaire. Quel style! Si vous pouviez lui faire avoir un article par Mario Proth, ou quelqu'un de vos amis, vous feriez une bonne action. Maintenant causons de nous.

J'ai vu le citoyen Bouilhet, qui a eu dans sa belle patrie un vrai triomphe. Ses compatriotes, qui l'avaient radicalement nié jusqu'alors, du moment que Paris l'applaudit, hurlent d'enthousiasme. Il reviendra ici samedi prochain pour un banquet qu'on lui offre : quatre-vingts couverts au moins, etc.!

Quant à Marengo Lirondelle, il vous avait si bien gardé le secret qu'il a lu l'épître en question avec un étonnement dont j'ai été dupe.

Pauvre Marengo! C'est une figure! et que vous devriez faire quelque part. Je me demande ce que seraient ses Mémoires, écrits dans ce style-là. Le mien (de style) continue à me procurer des embêtements qui ne sont pas minces. J'espère cependant, dans un mois, avoir passé l'endroit le plus vide! Mais actuellement je suis perdu dans un désert. Enfin, à la grâce de Dieu, tant pis! Avec quel plaisir j'abandonnerai ce genre-là pour n'y plus revenir de mes jours!

Peindre des bourgeois modernes et français me pue au nez étrangement! Et puis, il serait peut-être temps de s'amuser un peu dans l'existence, et de prendre des sujets agréables pour l'auteur.

Je me suis mal exprimé en vous disant 《qu'il ne fallait pas écrire avec son cœur》. J'ai voulu dire : ne pas mettre sa personnalité en scène. Je crois que le grand Art est scientifique et impersonnel. Il faut, par un effort d'esprit, se transporter dans les personnages, et non les attirer à soi. Voilà du moins la méthode ; ce qui arrive à dire : tâchez d'avoir beaucoup de talent, et même de génie si vous pouvez. Quelle vanité que toutes les poétiques et toutes les critiques! Et l'aplomb des messieurs qui en font m'épate. Oh! rien ne les gêne, ces cocos-là!

Avez-vous remarqué comme il y a dans l'air, quelquefois, des courants d'idées communes! Ainsi, je viens de lire, de mon ami Du Camp, son nouveau roman : *Les Forces perdues.* Cela ressemble par bien des côtés à celui que je fais. C'est un livre (le sien) très naïf et qui donne une idée *juste* des hommes de notre génération, devenus de vrais fossiles pour les jeunes gens d'aujourd'hui. La réaction de 48 a creusé un abîme entre les deux France.

N. B. M'avez-vous trouvé un titre? Ce n'est pas facile. J'en suis sûr. Et où êtes-vous maintenant? A Paris ou à Nohant?

Bouilhet m'a dit que vous aviez été, à un des derniers Magny, sérieusement indisposée, toute femme 《en bois》 que vous prétendez être. Oh! non, vous n'êtes pas en bois, cher bon grand cœur! Vieux troubadour aimé! Il serait peut-être opportun de réhabiliter au théâtre Almanzor? Je le vois avec sa toque, sa guitare et sa tunique abricot, engueulant, du haut d'un rocher, des boursiers en habit noir. Le discours pourrait être beau. Allons,

bonne nuit ; je vous baise sur les deux joues tendrement.

(op. cit., tome 14, pp. 316-317)

25.

[Paris, 17 décembre 1866].

(…) Votre vieux troubadour est encore malade comme un chien aujourd'hui. Ça ne l'empêchera pas d'aller au Magny de ce soir. (…)

Tout va bien d'ailleurs et je pars pour Nohant samedi.

(op. cit., tome XX. p. 241)

26.

Croisset, jeudi [27 décembre 1866].

Eh bien, chère maître, allez-vous mieux depuis que vous êtes à Nohant ? Quelle maladie avez-vous d'abord ? Qu'est-ce ? La vue de votre petite Aurore a dû vous faire du bien ?

Qu'est-ce qu'il faut vous souhaiter pour 1867 ? D'abord tout —— et puis le reste. Parmi lequel je demande cent représentations du *Mont-Revêche.*

Je n'ai absolument rien à vous dire, vous savez bien, si ce n'est que je m'ennuie de ne pas vous voir. Voilà tout.

Combien de temps restez-vous là-bas ? C'est-à-dire quand revenez-vous à Paris ? Moi je compte y être vers le milieu de février.

Ne vous ayant pas près de moi, je vous lis ou plutôt relis. J'ai pris *Consuelo,* que j'avais dévoré jadis dans *La Revue indépendante.*

J'en suis, derechef, *charmé.* Quel talent, nom de Dieu ! quel talent ! C'est le cri que je pousse par intervalles, dans le《silence du cabinet》. J'ai tant pleuré pour de vrai, au baiser que Porpora met sur le front de Consuelo ! … Je ne peux mieux vous comparer qu'à un grand fleuve d'Amérique. Énormité et douceur.

Je n'ai pas encore lu les *Odeurs* du grand homme nommé Veuillot. S'il n'y a pas d'injures contre vous, c'est incomplet. Et des gens d'esprit admirent tout cela, pourtant ! Oh ! saint Polycarpe !

Adieu. Je me sens tellement stupide que j'ai peur de vous assommer. Donc, je m'arrête. Donnez-moi de vos nouvelles et pensez à moi quelquefois.

Je vous embrasse tendrement, et suis votre vieux

M. Maurice a dû recevoir ses fromages, il y a déjà longtemps ? Ah ! j'oubliais une commission. Le père Pouchet m'a chargé de vous dire *que* : il était tellment troublé par votre présence qu'il avait oublié de vous dire *que* non seulement il admirait vos œuvres démesurément, mais encore celles de monsieur votre fils, etc. (quand il veut s'égayer, il ouvre *Masques et visages*) et il est revenu sur *sa* barbe, que n'était pas faite ce soir-là. Oh !

(op. cit., tome 14, pp. 318-319)